《もの・こと・ことば》

大となく 小となく

国分一太郎著

パピルス双書

合同出版

パピルス双書

合同出版

《もの・こと・ことば》

大となく 小となく

国分一太郎著

著者略歴
1911年山形県北村山郡東根町（現在東根市）に生まれる。1930年春師範学校を卒業して小学教師となり，同郡長瀞小学校に8年間つとめてクビとなる。以後軍属，工場勤務者，編集者をへて，現在児童文学の創作，教育・国語教育などにしたがう。植木いじり，豆，漬物つけを趣味とする。

パピルス双書
国分一太郎著
大となく小となく
—もの・こと・ことば—

定価330円
発行者　宮原敏夫
印刷所　同興印刷株式会社
製本所　本間製本株式会社
発行所　合同出版株式会社
東京都千代田区神田神保町1—52
電話（294）3506 振替東京 65422

1967年9月1日　第1刷発行

目次

刃物とこころ

父の遺品＝7　夢と恐れ＝9　採集家＝14　うるしかぶれ＝18　イッチャとエッチャ＝26　開封便律義＝28　小さな抵抗＝31　南瓜のころ＝34　秋風におどろく＝38　教師生活の思い出＝41　子供会の或る心理＝45　速達便＝48　おぼしめし＝51　はじめて参加したメーデー＝54　森脇将光氏と労働争議＝57　「だし」の話＝63　つけものについて＝66　ヒョウの話＝69　芋煮会＝71　生理と物理と論理＝72　千両＝75　耳あけ＝76　もらいブタ＝78　牛の目玉、高利貸の目玉＝79　ベビ｝ブームということば＝81

刃物とこころ＝83　「シャバフタギ」のこと＝85　島本隆司氏の死について＝86　「人さらい」と「国さらい」＝88　ガラスとカメ＝93　長谷部校長先生＝97　女をいじめるやせ男＝100　細いズボン＝103　分秒雇用＝108
教育者もの言いオヤジの弁＝111　親バカ野球ファン＝117　ありうるウソ＝120　人類の日、四月十二日＝123　年よりと若もの＝124　ギラギラとキラキラ＝127　死の不安初期＝131　しゃくぶく(折伏)＝134
東京という郷土＝136　東北弁＝138　「え」について＝140　だまりやの父＝145　忙しい父親が子どもを喜ばせる法＝148

新しい逆境

子どもと自殺＝155　「天皇へいか」にしてもらいたいこと＝157
ある母親の歌＝160

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

子どもの詩のことばについてひとつ＝163　家庭の主婦とコア・カリキュラム＝171　生活綴方の明るさ＝180
「天から金が降るようだ」＝183　いまこそ自由の精神を＝185　二人の修身＝187　新・逆境論＝189
いやなコトバの製造＝202　「おかあさん」の使いわけ＝203　浮くとき沈むとき＝205　おそれいった言論＝206　こちらにも責あり＝208　エイクソ！　テレビ＝209　働く母と子どもの教育＝212　小売店の書棚の片隅＝221

読まんなね

読書のたのしみ＝227　入門書好きの弁＝232　読まんなね＝237　本のねうちを知らせる＝238　子供の頃の読書＝241　生活綴方的読書法＝243　子どもの描いた日本と世界＝253　おとな同士になったんだ＝255

私の選んだ一冊＝258　ありがた迷惑みたいな話＝262　小説と私＝266
谷崎の文体＝274　百田宗治さんのおしごと＝277
石川達三『人間の壁』の中の問題＝280　『人間の壁』と『にあんちゃん』を見て＝284　映画『ともしび』から＝288　啄木の日＝292

「まえがき」みたいな「あとがき」＝295

双物とこころ

父の遺品

こんどわたしは父を失った。父は七十五歳だった。晩年はやめていたが、いなか町の理髪師だった。理髪師なぞというよりは、床屋といった方がずっとふさわしかった。近郷近在に聞こえたヒゲソリの名人だった。クリのいがのような荒いひげでも、モモの皮をむくようにスウスウと剃った。ろくに石鹸もつけぬようにして剃るのだが、お客は、それでいてちっとも痛くないからなと喜んだ。

父は終始日本剃刀をつかった。カランカランと音がするみたいな西洋剃刀は、自分でもいやだし、客もいやだろうと言って使わなかった。父は使いなれた砥石と剃刀をことのほか大事にした。ひまさえあれば剃刀をといでいた。客が帰ってしまった夜おそくになっても、店のかたすみで、剃刀をといでいた。といでは、自分のあらいひげに、ちょっちょっとあててみる父の姿を、少年のわたしは感嘆してながめることがあった。そのときの父の顔には、言うことのできない色がただよっていたのである。この剃刀とぎのため、父の左手の人さし指は、まるで骨のない指のように彎曲していた。

大正二年家が全焼したとき、父は砥石一本のみをたずさえて、外へのがれた。新しく買い入れた

剃刀はいくらも気に入るようにとげるが、使いなれた砥石は、一度失えば、すぐには手にはいらないからと考えたのかも知れない。その砥石と剃刀と指先と、そこから父のヒゲソリの名人は生まれたのかも知れない。

五、六歳になったころ、わたしは、父がよく母親に剃刀のとぎかたと、ヒゲのそりかたを教えているのを、目の前に見た。「ほんとにグズでだめだ」と叱りながら、父は、母が自分の砥石で自分の剃刀をとぐのを、じっと見つめていた。ときには母の指先をおさえ、うでをだきこむようにして教えもした。母は百姓の出で、父と結婚してから、はじめてこのようなワザを学ぶというわけだった。結婚して六、七年たっても、母は、父が思うほどのウデにはならなかったのにちがいない。叱られながら剃刀をとぐ母を、やはりわたしは、じっとながめつづけることがあった。父は、ときどき自分が椅子にかけて、母にそのひげをそらせることがあった。店に来るあらいひげの客にも負けぬほどあらい父のひげを、左手でもみながら、母は一心にそりつづけた。父は「そこらへんは下の方から」「そのへんは左から」と、いちいちさしずをした。自分のひげの生えぐあい、その向いている方向を、まるで暗記でもしているようにさしずをした。「よく見ればわかるじゃないか」と、いらいらした声をあげるときもあった。こうして叱られながらも、せっせと練習する母を、少年のわたしは、同情するような思いでながめつづけた。

死ぬ三年前から、父は高血圧になやんだ。人並以上に好きな酒も煙草もやめて、頭に血がのぼってくることばかりを気にかけていた。食後にリンゴをひとつ食うと、さっぱりした気分になるとい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

って、自分で皮をむいて食うようにした。愛用していた小刀を使って、皮をむくばかりでなく、リンゴの実をも、それで、すこしずつ剃ぎとるようにしては、ゆっくりと口に入れた。床屋をやめた父にとっては、かつて使いなれた砥石で、その小刀をとぐのが、元気であった過去への唯一の追憶だったのかも知れない。愛用の小刀は、いつもとぎすまされていた。

父が死んだとき、わたしたちはその遺品にさまざまな思いをはせた。なかでも、三年間、リンゴをむいて食ったその小刀の裏刃のところに、父の親指のあとが、くっきりとついているのに驚きの目を見はった。父の親指のあたる部分の鉄が、この目でもわかるほどに深くへっていたのである。

夢と怖れ

温泉はすきだ。温泉にひたって目をつぶっていると、今でも小さいときのことを思いだす。死んだ父といっしょに、わたしが三、四歳のころはじめてふきだした温泉——山形県の東根温泉だ——にはいったことを思いだす。その湯は、天野又右衛門という百姓が、日照りに困って、田に掘り抜き井戸をつくったら出てきたのだった。青田のなかに掘立て小屋がつくられ、板の湯ぶねがこしらえてあった。父にしがみついてはいったその湯のことを思うと、まあたらしい湯ぶねの板の柾目ま

でが記憶されているような気にわたしはなる。なおも目をつぶっていると、こんどはいま七十六歳になって郷里にいる母のことが思いだされてくる。あの青田のなかに温泉旅館がいくつもできるころになると、わたしたち貧乏人の家の子は、そこに行けなくなってしまった。それで本町の方から行くと一番入口のところにある「板橋」の湯に、祖母や母やわたしは行くのだった。おにぎりを持って、日曜一日いて、子どもはたしか二銭だった。昼食に豆腐汁なども煮てもらって食うときがあった。

わたしの住む三日町町内から温泉へ行く、まっすぐな道路ができ、その入口に立てられた棒ぐいに、温泉まで一四町四五間三尺だったかと書いてあったのも今に忘れない。こんな近いところに温泉がわくなら、あるいは自分の家あたりにもわくのではないか。こう思って朝起きたときに裏の物置小屋のじめじめしたところを見わたすときがあった。偶然に湯の煙がたっているなんていうこともありうるだろうと、少年の心で考えたのだ。そして、もしもその温泉が出たばあい、それは八右衛門様のものになるのだろうかと不安になったりもした。わたしの家のところは八右衛門旦那からの借地だったからだ。

こういう夢をいだいていたから、本当の温泉のところにある「だいやの湯」というのを、父の叔父にあたる人が買ったときはうれしかった。その人は、馬喰をしていて、バクチもうった。バクチのことで刑務所にはいったこともあった。ある年何で金をもうけたのか、その金で「だいやの湯」と呼ばれる温泉宿を買った。その「だいやの湯」は、温泉街からかなりはなれた田んぼの中に、ぽ

つんとひとつあった。父の叔父の手にそれがわたると、わたしたち兄弟はしきりにそこへ行った。こんどは無料で湯にはいれたのだ。

ところが、その「だいやの湯」は、買って二年目の冬に急に湯が出なくなってしまった。商売人にいろいろいじってもらったがだめだった。父の叔父は仕方なくその家を売りとばし、その設計のよい家はていねいにこわされて、どこかへ持っていかれた。あとは間もなく普通の田んぼになった。がっかりしているわたしたち子どもに父は言った。

「だからあの温泉は心配なのだ。いつ温泉の出がとまるかわからないから、よそのように大きな旅館も建てられないのだ」

このことが、温泉というと、今もわたしの頭に不安、怖れを抱かせる原因となったのだった。少年というものは郷土愛の気持がつよく、たとえば町内にあるコシキダケという山の高さが一〇一四メートルしかないことをすら、蔵王山の高さなどとくらべてくやしがるのであった。コシキダケのてっぺんに登っていって、一メートルぐらい、石や土で積んで、もち上げてきてやりたいなとの気持にもなったものだ。父のことばをきくと、わたしはくやしくて仕方がなかった。

「あの温泉、ほんとにとまるのかや？」

父の叔父の「だいやの湯」のことが身近にあるので、わたしは本気になって何度も聞きかえした。尋常小学校地理附図という五年生、六年生と二年間使う教科書の奥羽地方の山形県のここのところから、温泉のマークが消えていくことが心配で心配でたまらなかったのだ。地図の山形のところに

「父」という字と似た鉱山のしるしがないのにさえくやしさを覚えているのに、温泉マークがひとつへるということが惜しくて惜しくてならなかったのだ。それがわが東根町の大字本郷にある温泉であることにいっそうの悲しみがあったのだ。

それがもとになって、わたしには、大きくなったいまになっても、温泉宿の湯にひたると、父母や祖母とのことをなつかしく思いだすのといっしょに、一種の怖れをいだく習慣がついてしまった。

（あの温泉はだいじょうぶだろうか）

五階もある旅館のここの温泉にひたりながら、あの田んぼの中の小さな温泉のことを考えてしまうのだ。子ども心に心配しはじめてから四〇年、あの温泉も、どうやら持ちこたえているではないか、このごろはりっぱな旅館も建ちはじめたではないか、もう心配することはあるまい。こうも考えてみるのだが、「といっても、いつかはだめになるのではないか」と思う気持はぬぐいされないのだ。そして、こんなことを考えつづけていると、

「この温泉だって突然湯が出なくなったら、どういうことになるだろう?」と、こんどはこの大きな温泉場のことまで、ふと考えてしまったりするのだ。そのようなことに心配などしなくてもよいのにと自分では苦笑いしながら、やはり考えてしまうのだ。もっとも先年道後温泉に行ったとき、宿のひとから、

「山形高等学校（旧制）の先生だった人が、今は温泉の神様になっていて、わたしどものところも、あの先生にめんどう見てもらっています」

と聞いたときには、その先生、安斉徹先生のものしずかに話す顔を思いだすのといっしょに、

「それでは、あの温泉も、めんどうみてもらっていて、いまは大丈夫なんだろう」

と、気を休める気持にもなった。しかしわたしの目には、「だいやの湯」が突然止まったときに、泣きくずれるようにしていたむっつり屋の父の叔父と、その後妻である小さいからだの女のひとの姿がいまも焼きついていて、怖れの全部をすっかりうち消すにはいたらない思いだったのだ。

「いや、心配するな。湯が出なくなっても、温泉場だったという名が残っていれば、いまはわかし湯でも、けっこう間にあうのだから」

だれかがこんなふうに言うかも知れないが、それではわたしはものたらないのだ。ものたらないというよりは、いやなのだ。困るのだ。天然の湯がはじめて出てきたので幼いころからびっくりし、家の裏にまでそれがわき出てくれることを願っていたわたしは、その湯が急に出なくなることに、めっぽうな怖れを感じているのだから……。だから先日の新聞で、別府の湯が一部とまったとの報道をよんだときも、わたしは心の中で祈ったものだった。

——湯よ、湯よ、岩の間でも何でも通って、ぐいぐいとまた出てきておくれ。日本のどこの温泉の湯も、あの温泉の湯も出つづけてくれ。

採集家

小学六年生か高等小学一年のころであったかもしれない。そのころ、わたしは、たいへんな愛国者になっていた。愛国者になったわけは、いろいろある。日本の国が貧乏で、国民一人につき五〇円の国債を持っている。オギャアと生まれたばかりの赤ん坊も、その借金をしょっている。こんな話を聞いたことも原因のひとつだろう。自分の家が貧乏で、借金のあることなどは知っていたが、日本の国が貧乏だとあっては大変なことだ。こんなふうに考える考え方が、わたしの頭のなかに、いつのまにか育っていた。どうしたわけか育っていた。それから、わたしを愛国者ないし憂国者にしたわけは、日本の国の産物が、いたって少ないということだった。それは地理という学科を習っていると、いっそう痛感させられた。いつもみじめな話ばかりだ。鉄が出ない。石炭がたりない。石油が出ない。金や銀が出ない。綿が出ない。その他が出ない。出ないもの、たりないものばかりではないか。それに、南アフリカのことなど習うと、日本ではダイヤモンドが出ないこともわかってくる。これでは大日本帝国もみじめしごくだ。もちろん、そのころは、まだ「持たざる国」などというコトバははやらなかった。けれども、わたしは、じっさいには、この「持たざる国」をみじ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo